

学校法人 川副学園
博愛の里こども園

令和6年度
No.30



本園のHPです。
カラー版で拡大し
てご覧ください。

博愛の里だより

元気いっぱい やる気まんまん 笑顔にここに

令和7年 1月8日
文責：五反田 康子



あけまして おめでとうございます。

2025年が明け、令和7年となりました。
今年もどうぞよろしく願いいたします。



令和7年の元旦は快晴でした。ご家族で良いお正月を迎えられたことと存じます。子供たちもお正月ならではの文化を楽しめたのではないのでしょうか。気持ち新たに家族で過ごす貴重な時間。大掃除や新年準備、除夜の鐘に年越しそば(寝ていたかな?)、お年玉に親戚との行事…等、充実した冬休みをありがとうございました。凧揚げやコマ回し、羽子板、福笑い、だるま落とし、すごろく遊びなどの伝統遊びを園でも体験させたいと思います。

さあ、博愛っ子たちも制服で元気に登園してきました。ばら組さんにとっては博愛の里こども園に登園できるのも後45日(+21日)。残されたこども園生活を十分に満喫し、胸を張って小学校へと進学してほしいと思います。今年も本園へのご理解・ご協力、よろしく願いいたします。2025年も「**元気いっぱい、やる気まんまん、笑顔にここに**」で!

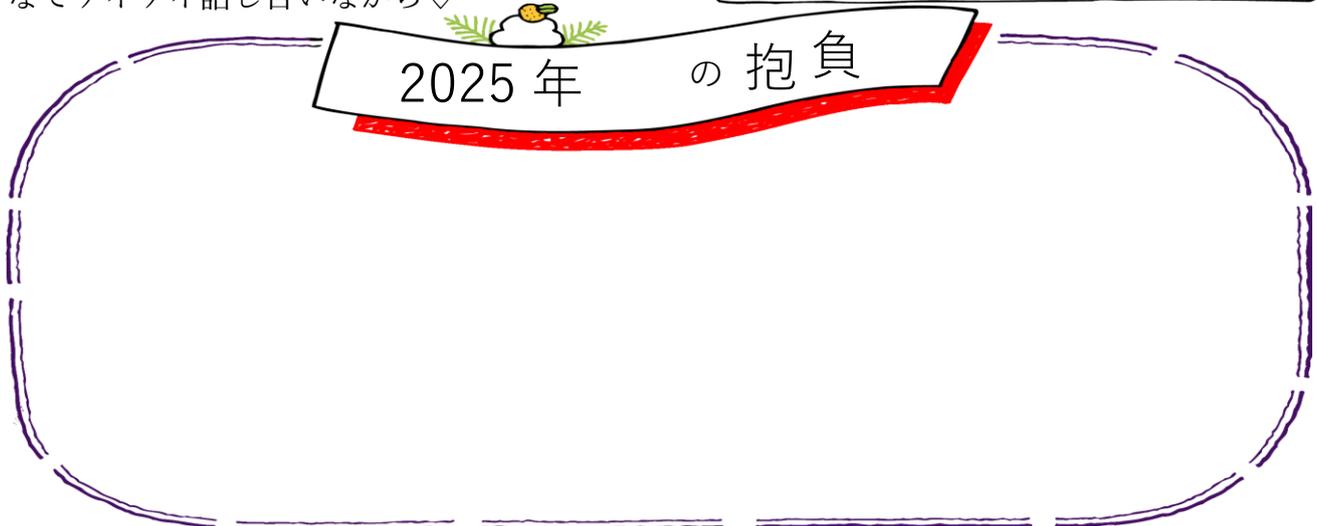
是非、下の囲いの中に今年の家族(親として)の抱負や目標を書き入れてみてください。みんなでワイワイ話し合いながら♡



- 3日(月) おはなし会
- 4日(火) 体育教室
- 5日(水) お誕生会 ばんだ教室
- 6日(木) 英語遊び(年中)
大詫間小5年生との体験入学(ばら)
- 7日(金) 中川副小1年生との体験入学(ばら)
- 11日(火) 祝・建国記念の日
- 12日(水) ばんだ教室
- 13日(木) 避難訓練
- 14日(金) お別れ遠足(ばら)
- 17日(月) 食育指導(さくら・ゆり)
- 18日(火) 体育教室
- 19日(水) ばんだ教室
- 20日(木) 英語遊び(ばら)
- 23日(日) 祝・天皇誕生日
- 24日(月) 振替休日
- 25日(火) 体育教室
- 26日(水) ばんだ教室
- 28日(金) エコ回収日

※ 現時点での予定です。

2025年 の 抱 負





○ インフルエンザが猛威を奮っています。(意見書兼登園届が必要で)

- ※ 手洗い、うがいの励行を。早めの受診をお願いします。
- ※ 「早寝早起き朝ごはん」で免疫力を！

ちょっと気になる記事を見つけました。参考までに……。

私幼時報 2024.12月号 Vol.477 より

視点

チャレンジ精神を育む脳科学

脳科学者 西 剛 志



私は普段、子育てがうまい人とそうでない人の違いを研究しています。全国の幼稚園や保護者向けにも講演も行い教育の現場によく入りますが、特に最近、先生からよく聞くのが『自信だけは高く新しいことにチャレンジしない子どもが増えて困っている』という声です。

そういった子どもは「私こんなこともできる!」「すごいでしょ!」と満面の笑みで自慢してきます。しかし、新しいことになると消極的。多くの先生や園長先生からも、どうしたらよいか相談を受けることもあります。

理由は多々考えられますが、最も大きな原因の1つは、意外にも「ほめるだけの教育」にあることが指摘されています。これを理解するために、スタンフォード大学をはじめとする「子育てスタイル」の研究からわかってきた親の4つのタイプを紹介します。おおよそ親は次の大きく4つのタイプがあります。

<親の4つのタイプ>
 支援型 (ほめる+しかる)
 迎合型 (ほめるだけ)
 厳格型 (しかるだけ)
 放任型 (関心をもたない)

2016年の日本人1万人を対象とした研究では、どんな親に育てられたかで子どもに影響があると報告されています。何でも挑戦しようとする「前向きな性格」は迎合型の親に育てられた子どもよりも「ほめる+しかる」支援型の親に育てられたほうが3~10倍以上高くなりました。

つまり、ほめる育て方だけではチャレンジ精神が育まれにくいことがわかってきたのです(もちろん統計学なので、例外もあります)。

また海外の研究でも、研究者は子どもに問題を解かせて、成績をほめたグループとほめないグループに分けました。すると、驚いたことに、ほめられた子どもは、その後、難しいことにチャレンジしようとしなくなってしまったのです。

子どもは「頭がいい」と能力をほめられると、「頭がいい=問題ができる」という状態を維持するために、確

実にできる簡単な問題ばかりに取り組むようになります。その結果、難しい問題にチャレンジしなくなってしまったのです(逆にほめないほうが、能力をほめるグループよりも難しい問題にチャレンジするようになりました)。

ただし、この実験ではほめ方を工夫したところ、圧倒的に難しい問題を選択するグループが発見されました。

それが『努力をほめられたグループ』だったのです。

この現象は動物も同じで、曲芸をするイルカにショーが終わったときに「あなたはすごい!」とエサを上げるよりも、イルカが大きくジャンプするたびに「すごいね!」とプロセスに反応してあげると、イルカはもっとジャンプしようとしています。

ほめられると、脳の報酬系(線条体)が活性化して、やる気の神経伝達物質であるドーパミンを分泌します。努力をほめられると、人や動物はもっと努力しなくなってしまふ生き物なのです。

「能力をほめるのではなく、努力をほめる」、「下手にほめるよりは、ほめないほうがよい」、このことを覚えておくと、子どもはどんどん難しい問題にチャレンジして、大人になってからも新しいことに挑戦して、あらゆる困難を乗り越えていく人になっていくでしょう。

環境変動やAIによる高度情報化などこれまでの常識が覆されていく時代では、チャレンジを恐れる「二セの自己肯定感」ではなく、「本物の自己肯定感」が必要となってきます。そのためにも、私たち大人が、正しいほめ方を学び、共有していくことが大切です。

プロフィール

西剛志 (にし・たけゆき)

脳科学者/工学博士(分子生物学者)

東京工業大学大学院生命情報専攻卒。博士号を取得後、特許庁を経てうまくいく人とそうでない人の違いを研究する会社を設立。才能を引き出す方法などこれまで企業から教育機関まで3万人以上に講演会を提供。NHKスイッチインタビュー、ザ・世界仰天ニュース、カズレーザーに学ぶなどメディア出演多数。「脳科学的に正しい一流の子育て」など11冊の著書シリーズは海外も含めて累計37万部。